

**永遠の命よりは慈悲を****ルカ10:25~37 / 李正雨師**

人類は、古代社会から命に大きな関心を持っていたそうです。医学の父であるヒポクラテスだけでなく、哲学者として知られたアリストテレスも命に関心が強かった生物学者だったそうです。古代ギリシャだけでなく、中国やインドでも、命は人々の関心を引くテーマでした。中国の初代皇帝である始皇帝も命に大きな関心を抱き、自分の不老長寿のために薬草を探すことに血眼になっていました。不老不死の薬草を探してくるという言葉に騙されたこともあり、水銀が不老不死の薬だと思って、水銀を服用、水銀中毒になって人生を終えたそうです。ルターの宗教改革も、この命と関係が深かったと思います。ルターの時代には、ヨーロッパ全域にペストが流行していました。ルターの兄弟の中でも、ペストによって命を失われた人がいました。そしてこのペストは、多くの人々に死と命について悩ませました。ルターが裁判官の道を捨てて修道士になったのも、当時の状況の影響だったと思います。後にルターは、修道士の身分でヴィッテンベルク大学の教授になり、そこで、免罪符の販売を批判します。この批判は、主に免罪符と煉獄についてのことでしたが、これも、人間の死と永遠の命の問題と密接に関連していると見られます。この批判は、95か条の論題という名前で当時の大司教に送られ、翌日ヴィッテンベルク城教会に掲示されました。そして、これが宗教改革の発端になります。命に関することがルターを修道士にし、宗教改革を起こさせたのです。

今日の福音書も命と関連がある言葉です。今日の福音書では、永遠の命という言葉が出てきます。この言葉は、ある律法の専門家から出た言葉ですが、彼はイエス様にこう尋ねます。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか(25節)。」この質問は、律法の専門家からの質問らしくありませんでした。まるで5歳の子供の質問と同じくらいでした。当時のユダヤ人たちは、幼い時から神様に選ばれた自分たちは、みんな永遠の命を受けると学び、教えていました。律法の専門家もこのようなことを確かに知っていたでしょう。しかし彼は、イエス様に子供がしそうな質問をしました。ここには確かに隠された意図があったのだと思います。今日の福音書25節でも「イエスを試そうとして」と書かれており、質問のレベルも非常に低かったからです。

それで、私はこの律法の専門家の質問について、あれこれと考えてみました。そしてイエス様の教えと宣教の始めは、どうだったかを考えてみました。イエス様の教えは既存の教えとは違い、宣教も同じでした。ユダヤ社会の既存の教えは、律法が中心となり、血統を大切に思いました。選ばれた民として律法を守れば、報われることになり、そうでなければ、罰を受けることになるということが彼らの教えでした。永遠の命も選ばれた者のものであり、平和も同じでした。そのため、彼らの宣教は、血統中心の宣教であり、外国人がユダヤ教の信仰を持つことになっても、同じ民族として認めてくれませんでした。でも、イエス様の教えは違いました。イエス様の教えは選ばれた民だけのものではなく、宣教の対象もユダヤ人だけではありませんでした。これは、先週の説教の時間に申し上げた70人の派遣でよく現れていますが、弟子たちは、派遣された所から出される物を食べ、また飲まなければなりません。しかし、弟子たちが派遣された所は、ユダヤやガリラヤではありませんでした。サマリアとデカポリスの近くにある町だったので、弟子たちは、律法を守っていない所にも派遣された可能性が高いです。律法が守られない所に派遣された弟子たちは、まさに律法を守れなかったでしょう。そして、今日の福音書に登場している律法の専門家は、このすべてのことを知ってイエス様に永遠の命について質問したのだと思います。律法も血統も守らないあなたの国では、何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるのかという質問だったのです。

この質問に、イエス様は「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と問い返されます。イエス様がこのように問い返された理由はあるでしょう。律法が語っている永遠の命について知らないの、問い返されたのではないでしょう。イエス様の質問をよく見てみると、この質問が二つに分かれていることが分かります。一つは、律法に何と書いてあるか、もう一つは、あなたがどう読んでいるかです。この質問を通して、律法の専門家が何を最も大切に思っているかが分かるでしょう。彼は、旧約聖書の申命記6章の言葉とレビ記19章の言葉を、永遠の命を受け継ぐための言葉として選びます。今日の福音書27節の言葉です。「彼は答えた。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい(申命記6:5)、また、隣人を自分のように愛しなさい(レビ記19:18)』とあります。」

まず、この申命記の言葉は「シェマー・イスラエル」、「イスラエルよ、聞け」という言葉として、ユダヤ人たちは幼い頃から学び、暗唱する言葉です。これは神様の命令によるユダヤ人の信仰の根本だと言えます。申命記6章6-7節にはこう書かれています。「今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子供たちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。」ユダヤ人たちは、この言葉に従ってシェマー・イスラエルを教え、学びました。そして朝夕にこの言葉を暗唱し、自分たちの信仰と民族的なアイデンティティを確立しました。この申命記の言葉に続いて出ているレビ記19章の言葉「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉も、ユダヤ人にとっては大切な神様の命令でした。これは隣人に対する十戒の言葉をまとめたものです。しかし、レビ記19章18節を見ると、この隣人は、同じユダヤ人を称することであることが分かります。つまり、律法の専門家の永遠の命の基準は、律法と血統で満ちていたのです。

イエス様はこのように答えた律法の専門家に「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」と言われます。この言葉は、本当に律法の専門家の答えが正しいという意味ではないでしょう。彼は、神様と隣人への愛を覚えて話していますが、それさえも守っていないということをイエス様は知っておられたのだと思います。それでイエス様は、これだけでも行いなさいと言われたのです。律法の専門家が選んだ永遠の命の言葉がイエス様の教えとは違ったとしても、彼らユダヤ人に与えられた神様の言葉だったからです。しかし、律法の専門家はこの答えを聞くことで満足していません。イエス様に他の質問をします。彼の他の質問は、「私の隣人とは誰ですか」ということです。この質問の意図は明らかです。それはイエス様を試そうとすること、皆の前でイエス様が律法と血統を大事に思われていないということを示すことでした。

このような律法の専門家の質問に、イエス様は、皆様がよくご存じの善いサマリア人の話をなさいます。この言葉を通してイエス様は、良い隣人になるためには、同じ血統や律法を必ず守る必要はないということをおっしゃいます。むしろ、律法と血統が重要な人物を登場させ、彼らの偽善を示されます。イエス様の言葉に登場している人物は、4つの部類の人々です。追いはぎに襲われた一般の人、祭司長、レビ人、サマリア人です。追いはぎに襲われた人は、エルサレムからエリコに下っていく途中襲われました。エルサレム神殿を訪れた後に、ひどいことをされたのです。エルサレム神殿を訪れる理由は、いくつかありますが、一般的には律法を守るためです。律法によるいけにえや献金をささげるために、祭りを守るためにユダヤ人たちは、神殿を訪れました。しかし、律法を守ったにもかかわらず、彼は追いはぎに襲われました。これは、律法を守ることが必ず報いと平和をもたらすことではないことを、イエス様は教えられているのです。そしてこの追いはぎに襲われた人を祭司長とレビ人が見ます。ここで面白いのは、祭司長はユダヤ社会で血統によって受け継がれる代表的なグループだということです。また、レビ人は、祭司を助け、神殿を管理する人として立てられましたが、新約聖書の時代のレビ人は、主に律法を研究している人でした。つまり、イエス様に質問をしている律法の専門家がレビ人であった可能性が高いということです。そして、血統と律法を代表しているこの二つのグループは、追いはぎに襲われた人を通過していきます。レビ記19章の律法を守らなかったのです。

しかし、サマリア人は追いはぎに襲われたユダヤ人を助けます。彼を治療して、介抱のために費用を出します。なぜ彼は、このユダヤ人を助けたのでしょうか。律法を守るためでしょうか、それとも、同じ血統だったからでしょうか。彼がユダヤ人を助けた理由は、ただ人間の慈悲の心でした。律法や血統とは、全く関係ないものでした。追いはぎに襲われた人を哀れに思うこと。それがサマリア人が追いはぎに襲われた人を助けた理由だと思います。そしてこれは、神様の教えによく従っていることでした。イエス様はこの話を通して、当時の律法の専門家やユダヤ人たちが持っている考え方はどれほど正しくないものだったのかを教えてください。また、永遠の命も受け継がれるものではないことも教えてください。永遠の命よりは慈悲を求めること。これが神様の言葉を守ることであり、永遠の命を得られる道なのです。

今日の福音書は、私たち信仰の人に多くのことを考えさせる言葉だと思います。時々、私たちは、私たちの信仰に従って人を助け、教会の名前で寄付と奉仕をしています。もちろん、これが間違っているとは思いません。しかし、私たちの信仰や教会の名前で何かをする前に、私たちが慈悲の心を持っているのかを顧みるのが良いと思います。神様の命令だから、又は信仰の人のやるべきことだからやるのではなく、神様から頂いた慈悲の心で隣人を助けるのが、神様の言葉に従うのではないのでしょうか。私たちの礼拝と祈りのことも、献金と奉仕のことも同じでしょう。私たちの信仰によるすべてのことは、永遠の命のためだけにすることではないのです。神様が私たちに慈悲の心を与えてくださいますように。目的と理由ではなく、ありのままに隣人を愛する皆様になりますように、主の御名によって祈ります。アーメン